

石原ケンジは紙に墨の 16 点の作品を壁面に飾り、那須光則は銅とステンレス、鉄の作品を 9 点（1 点は 5 つでワンセット）床に散りばめた。全く異なる二人であるにも関わらず、まるで一人の作家による作品に見えるのは、二人が共にモノクロの世界観で人体とその動きを線によって表そうとしている点にあるのではないだろうかと思測する。それによって二人は、繊維と鉱山という素材を乗り越えることが可能となったのである。この超克は、二人展だから可能であったのか、それとも二人ともア priori に備えているのだろうか。



まず、石原の作品の詳細を見ていこう。筆による繊細な線と墨独特の滲みを自在に操りながらも、フリーハンドが強調されるほど自由に、素早く、そして溜めを利かせて描かれ、抽象的な形となって止まっていく。新鮮な

魚類が飛び跳ねるイメージを想起させるほどに、作品群は生命力に満ち溢れている。墨の濃淡がモノクロ以上に複雑な色面を生み出していく。

那須の作品に目を移すと、銅や鉄といった異なる素材を用いている筈なのだが、総てが良い意味で同じに見える。物質を感じさせないのだ。硬固な要素を強引に捻じ曲げるの



ではなく、まるで鉛かプラスチック、若しくは粘土や紙といった柔らかいものを曲げるように、自然な形体を保持している。それは手業という人体動きに直結し、軽さにはリアリティが深く介在しているように感じる。



二人の作品は現実とは何かを抉り、見るものへ突きつけていく。視線を平面から床に落とすのではなく、膝を曲げて屈み、床から平面を見渡すと、尚の事、この二人の特色が浮き彫りとなる。二人は個々に線に対する追及を行いながらも、この展覧会においてその特徴が強調されたのだ。現代に対する課題とは、個を乗り越えて派生していく。この課題に対してどのように向き合うのかは個々の問題となるが、課題を共有するのが、現代美術に生きる姿なのだ。

